アルザスの青い空
大久保昌一良

Le Ciel Bleu
d'ALSACE

ドスの青い空

大久保昌一良

Le Ciel Bleu d'ALSACE

大久保昌一良
昭和22年７月４日生まれ。福井県福井市出身。明治大学文学部卒。家族構成、妻１人、娘１人、スピッツ雑種１匹、紅雀１羽。趣味、人間（？）、酒。テレビ作品『水戸黄門』『ルパンⅢ世』『くれない族の反乱』等多数。その他舞台、ラジオ作品多数。

アルザスの青い空
Le Ciel Bleu d'ALSACE
一九八五年十月十六日　初版第一刷発行
著者　大久保昌一良
発行人　日枝　久
発行所　㈱フジテレビ出版
〒一六二　東京都新宿区河田町七
発売所　㈱扶桑社
〒一六三　東京都新宿区西新宿二―七―一
新宿第一生命ビル十階
電話（〇三）三四三―二〇〇〇
印刷・製本　大日本印刷㈱
落丁本・乱丁本は、扶桑社販売部（書籍）宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
©大久保昌一良 1985 Printed in Japan
ISBN4-89353-057-7　C0093 ¥1300E

アルザスの〝こころ〟を伝えたい

人との出会いの不思議さと、言葉は通じなくても人間は理解し合えるということに、このドラマ『アルザスの青い空』をプロデュースして、また感動しています。

「アルザスを舞台にドラマを作ってください」。アルザス東京事務所の富永雅之氏が私を訪ねてこられて、こう言われたのが'84年の9月。アルザス・ロレーヌ割譲、ずいぶん昔に歴史の教科書で習ったような気がします。ドーデーの『最後の授業』という話はアルザス地方の村を背景としていると教えてくれたのは富永氏でした。

恥ずかしい話、この程度のアルザスに関する知識で、'85年の2月アルザスの首都ストラスブールとコルマールを訪れました。アルザス開発公社の委員長アンドレ・クラインさんやベルナール・エッテルさんが出迎えてくれました。英語は多少、分かりますが、フランス語は全くダメ。ただ、二人が非常に真摯な人たちであることはひと目で分かりました。二人は観光映画のようなドラマにはしてほしくない、アルザスの人々の生活と〝こころ〟を反映したストーリーにしてほしいと熱心に説いているらしい。通訳氏に聞いたら、その通りでした。

エッテルさんの案内で、アルザスワイン街道に点在する村をシナリオ・ハンティングに出かけました。さて、コルマールから車で15分、人口600人というニダモルシュヴ

ィルという村でのことです。木組に白壁という民家が並ぶこのワイン村はまさにヨーロッパの雰囲気十分。どこにカメラを向けても絵になります。ところが、寒さのためか昼だというのに、町の中を人ひとり歩いていないのです。家の中に人がいる気配はするのです。窓辺のレースのカーテンが時折り、フッと揺れるので分かります。道を行く人に向けられた視線を感じるのです。そこで、失礼を承知で一軒の家を突然訪問することにしたのです。どうしても、この村の人たちのことを知りたかったし、飾り気のない生活をじかに見せてもらいたかったからです。

その家の居間に通された時、私はここで「ドラマを作ろう」と決めてしまいました。居間には所狭しとばかりに、花の鉢が置いてあり、実によく手入れをされていました。鉛色の空の下、冬ごもりをしている村の人々は、大事に大事に花を育てているのです。

アルザスのワイン街道にある百近いワイン村の人々は、春がくるとその鉢植えの花を一斉に窓辺に飾り、どの村が一番美しい花をたくさん咲かせたかを競い合うそうです。この村では古い井戸さえ、春には大きな花瓶に変ります。

次に訪ねた村長のディートリッヒさんのお宅では、奥さんのイボンヌさんがカーブ（ワイン蔵）に案内してくれて、ワインの試飲をさせてくれました。アルコールはすべて受けつけない私は、フルーティなアルザスワインのかけつけ三杯イッキ飲みで、すっかりフラフラ。村で一軒のパン屋のフェルベールさんはご自慢の菓子をたっぷりご馳走してくれたし、全生徒40人のニダモルシュヴィルの小学校の先生アンヌさんは、生徒の出演

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を快く受けてくれました。今までカーテンの向こう側にいた人たちが、次々と現われてきました。皆な素朴で親切で、おしゃべりです。

クラインさんが言うように、アルザスの人たちの〝こころ〟の温かさを感じたのは、季節とワインのせいばかりではありません。

このドラマにはその時お会いした村の人たちがたくさん出演しています。子供たちも——エマニエル、チェリー、ヴァンサン、トマ——立派なセリフつきの役です。上手(うま)いのです。言葉は通じなくても、アルザスの人たちの温かい〝こころ〟と、生活を楽しむ〝ゆとり〟は、きっと伝わっていくと思います。

このシナリオ本とご一緒にアルザスの美しい映像とドラマをお楽しみください。

フジテレビ・中村敏夫

目次

アルザスの〝こころ〟を伝えたい 1
第1回 PRINTEMPS（春）1er 9
第2回 PRINTEMPS 2ème 43
第3回 PRINTEMPS 3ème 67
第4回 PRINTEMPS 4ème 91
第5回 PRINTEMPS 5ème 115
第6回 ÉTÉ（夏）1er 139

第7回　ÉTÉ 2ème ―― 165
第8回　ÉTÉ 3ème ―― 195
第9回　ÉTÉ 4ème ―― 223
第10回　ÉTÉ 5ème ―― 251
第11回　AUTOMNE（秋）1er ―― 279
第12回　AUTOMNE 2ème ―― 307
アルザス・ロケ日記／欧州の十字路・アルザスを訪ねて／脚本家からのメッセージ ―― 341

出版プロデューサー　遠藤龍之介
編集　酒井真由美
ブックデザイン　浅葉克己
山本昌美（浅葉克己デザイン室）
カメラマン　横井隆和
イラストマップ　宮古　哲

アルザスの青い空

本書は一九八五年十月十日から十二月二十六日までの、フジテレビ系全国ネット放映ドラマの原作シナリオです。なお、放映にあたっては内容に一部変更のあることをお断りします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第1回　PRINTEMPS 1er

吉村の家・表

西独・デュッセルドルフ郊外の、小ぢんまりした二階建て。
ベンツのタクシーが停っていて、吉村行雄（34才）が運転手に手伝わせて、トランクや後部座席に旅行バッグ等の荷物積み込んでいる。その前に吉村の旧型フォルクスワーゲン停っている。

同・リビング

入口の脇に日本へ送るダンボール箱等の荷物がいくつか積み上げてある。
部屋の真ん中で娘の純子（10才）が、愛犬のルパンに抱きつくようにして座り込んで、毛を撫でている。

純子「……ルパン……さようなら……元気でね……」
泣くまいと感情押さえているが、言葉詰ってしまう。

純子「……」
吉村が、少し開いていたドアから入ってこようとして、純子の後姿が目に入り足停める。

純子「……ルパン、パパをお願い……お願いよ、ルパン……」
こらえられず涙にじんでくる。
吉村は声をかけることもできず、こみ上げてくる感情を押さえている。
旅装になった妻・彩子（31才）が降りてきて純子に気付いて、踊り場で立ち停る。
吉村が彩子を見る。
彩子も振り向いて、吉村と二人の視線がぶつかる。
互いに感情を拒んでいる。

吉村「……」

彩子「……」
吉村は視線を純子に戻す。
いつの間にかこちらを見ていた純子の視線とぶつかる。
必死で訴えかける純子の目。
吉村に熱いものが、こみ上げてくる。

純子「（涙一杯で）パパ……さようなら……」
吉村も涙にじませながら、頷く。
彩子は懸命に感情押さえている。

純子「……パパ……」

吉村「(もうひとつ頷いて)体、気をつけろ……」
彩子は決意して、階段を一歩ずつ、降り始める。
吉村は純子を見つめ続ける。
純子はルパンにしがみついて顔を毛に埋めて肩震わせる。
彩子停まる。
吉村。
打ち破るかのように、ジェット機のエンジン轟音。
画面一杯に拡がる。

デュッセルドルフ・空港

エプロンでエンジンを試運転させる日本航空(JAL)機。
Ⓣデュッセルドルフ空港

同・日本航空・受付カウンター

彩子がチェックインしている。その横で吉村がトランクを台上へ乗せている。
純子「(トランクに手添えて)パパ」
吉村「(見る)」
彩子もチラッと見る。
純子「お酒、くれぐれも飲み過ぎないでね……」
吉村は大きな手で、純子の頭を少し乱暴に撫でる。
彩子。

税関

彩子と純子が手続き済ませて、通って行く。
純子は吉村の居場所求めて、何度か振り返る。
少し離れたとこに立っている吉村の表情からは、感情が消えている。
彩子と純子は通関して、ゲートへと向かって歩く。
と、純子パッと反転して駆け戻ってくる。
仕切りのガラスに張りつく。
吉村も反射的に駆け寄って、ガラスに両手を当てる。
純子がガラス越しに、手当てて叫ぶ。
純子「パパ!……お手紙……ちょうだい!」
吉村大きく頷く。
向こうで見ている彩子。
ジェット機のエンジン轟音。

滑走路

日本航空機(JAL)が、エンジンの轟音上げ

て、滑走していく。

同・駐車場

吉村がワーゲンに寄りかかるようにし、うつ向いてタバコ吹かしている。

滑走路

ＪＡＬが飛び立って行く。

駐車場

吉村がタバコ踏み消して、ワーゲンに乗り込もうとするその上空に、彩子と純子の乗った日航機が、上昇して行く。感情を失った顔で吉村は見つめる。

日航機みるみる上昇して行く。

遠く小さくなってゆく日航機

タイトル

『アルザスの青い空』

アルザス地方の情景が、澄んだテーマソングとともに、詩情あふれて流れる。

クレジット

前景からひき続き、

中世の都市・コルマール。

延々と続くぶどう畑。

城壁に囲まれた町。

そして――、

ニーデル村。

教会。

学校。

ワイン蔵。

遊ぶ子供達。

日航機・機内

窓際に純子。内側に彩子が座っている。

パーサーのアナウンスの後。スチュワーデスがジュースを運んでくる。

彩子も純子も礼を言って、ジュース受け取って飲む。

純子はイヤホーンをつけて、窓の外眺めながら飲む。

彩子、斜め前の席で一才ぐらいの男の子が母親の膝上で、あやされて笑い声たてているのが目

に入る。
思わず見つめる彩子。
幸せそうな子供と母親。
彩子。

デュッセルドルフ・中央公園（彩子の回想）

七年前。
吉村と彩子が風船を持った純子（3才）と手をつないで笑いながら歩いてくる。

× ×

芝生。
吉村は寝転っている。彩子はその脇に座ってリンゴの皮剥いている。
純子は向こうで、風船持ったまま鳩（小鳥）の群を見ている。
吉村「自信ついたよ」
彩子「（見る）」
吉村「おまえも純子も、こっちの生活になじんでくれたし」
彩子「ええ、日本人も多いし、お魚もお肉もおいしいし……東京よりずっと住みやすいわ」
吉村「一年居てみて、本当にそう思うな」
彩子「純子も、すごく伸び伸びしているし」
吉村「（頷く）……来年……遅くとも 再来年には始めようと思っているんだ」
彩子「？（顔を見る）」
吉村「会社が扱おうとしない商品や、取り引き先ずい分あるんだ」
彩子「……」
吉村「商売として、けっこう面白いのに、今の東日商事のやり方じゃ駄目なんだ」
彩子「（あいまいに頷く）」
吉村「永住して、骨埋める気でかかんなきゃ商売なんてうまくいかないさ」
彩子「永住って……」
言葉探している。
と向こうで純子の泣き声がする。
二人同時にハッと見る。
純子が転んで、風船が空に舞い上っている。
二人同時に立ち上って、駆け出して行く。
何発ものクラッカーが弾ける音が被って——。

吉村の家・リビング（回想）

二年前。
部屋の隅に小さなクリスマスツリー。
部屋の装飾や戸棚等の上にクラッカーから飛び

出した紙テープ等がくっついている。
吉村と彩子、純子を中心に、井沢順次（37才）良美（33才）大助（10才）大野二郎夫妻、その他にドイツ人の老夫妻と三十代の夫婦が大人はシャンパン、子供はジュースでグラス持ち上げる。井沢が音頭取る。
井沢「ではクリスマスと、吉村インターナショナル貿易の設立一周年を祝って、乾杯」
グラスが音たててぶつかり、一同飲む。
吉村「どうも、ありがとうございます。Danke schön」
とドイツ人に頭下げて、握手する。
吉村「(独語)あなたのおかげで、取り引きがうまくいきました。感謝しています」
井沢「(独語)どうです。吉村はなかなか商才のある男でしょう」
老ドイツ人「(独語)そう。信用できる男だ」
と吉村に頷き、彩子見て微笑む。
吉村「Danke schön　(強く握手し返す)」
彩子「ダンケ・シェン」
彩子も握手する。
彩子「えっと、それでは、たいしたものありませんけど、どうぞごゆっくりなさってください」
井沢が訳してドイツ人に伝える。
彩子「それから、あの……わたしのこしらえたお寿司も今お出ししますので」
井沢「奥さん、それ最高！(独語で)最高！」
彩子ニッコリ笑って台所へ行く。

同・台所（回想）

皿に並べた巻き寿司や押し寿司に被せてあったラップを彩子取る。良美が入ってくる。
良美「手伝うわ」
彩子「いいの、今日はあなたお客様」
良美「気にしないで」
と持ってきたワインをひと口で飲んで、小皿を戸棚から出す。
彩子「いけない。忘れてた」
良美「……うらやましいわ、彩子さん」
彩子「全然。東日商事にいた頃の方が、ずっとよかったわ。土日だって仕事ばっかりなのよ」
良美「でもご主人が輝いているのは、いいわ」
と慣れたかんじで冷蔵庫開けて、ワイン出して注ぐ。
良美「いただくわよ」
彩子「どうぞ」
良美「うちのなんか、毎日帰ってきちゃ、上司の悪

口言って飲んで、テレビ観ながらいつの間にかいびき。これ、本当に毎日なのよ」
彩子「うちだって、同じようなものよ」
とリビング見る。

リビング（回想）

彩子の見た目で――。
吉村は井沢や大野夫妻と談笑している。
クリスマスツリーのところでは、床に座った純子と大助がルパンにケーキを食べさせている。

× ×

三時間後。
パーティは少し前に終って、皆んな帰っていない。
純子も二階で寝てしまったらしい。
ソファでは酔い潰れた吉村がうつらうつらしている。
後片付けをしている彩子が、台所から出てきて吉村に気付いて、浴室の入口横の戸棚をそっと開けて、毛布を出して、ソファの吉村にそっとかける。
衿のところをかけなおす彩子の手を、吉村が握った。
彩子「（軽く驚いて）起きているの？」
吉村は答える代りに手を引く。倒れかかる彩子を吉村は強く抱きしめ、体を入れかえて唇を重ねる。

リビング（回想）

別の日。
彩子が泣き出さんばかりの表情で電話している。
彩子「ねえ、そんなこと言わずに帰ってきてお願いよ。あなた……」
吉村の声「できるくらいなら、そうしている」
彩子「四十度近くも熱があるのよ」
吉村の声「だから医者を呼べって言っただろう」
彩子「通じないのよ……わたしの言い方では……」
吉村の声「（苛立って）分った！ 俺の方から電話して救急車を手配する。分ったな！」
電話が切れてしまう。
彩子電話を握りしめたまま、心細く涙ぐんでしまう。
二階から、かすかな純子の声。
純子の声「ママ……」
彩子は我に返って、電話を置いて二階へ駆け上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com